

\*著作権は著者に属します。

\* Copyrighted materials of the author

基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」研究会

日時：2011年12月22日（木）14:00-16:00

場所：AA 研マルチメディアセミナー室(306)

内容：

Aftandil Erkinov (日本学術振興会外国人研究員／タシュケント東洋学大学)

'Problem of Legitimation in Kokand Khanate'

発表要旨：

1710年頃にウズベクのミン族によって建国されたコーカンド・ハーン国は、1810年に英主ウマル・ハーンの時代を迎える。彼は、さまざまな手段によって、支配の正統性を確立しようとした。運河や王宮、モスクや都市の建設に加え、聖者アフマド・ヤサヴィーの廟のあるトルキスタン市の征服のほか、歴史・文学作品を通じて、自らの正統性を主張した。特に Mushrif Isfaragi 著の『ウマル・ハーンの王書』は、アルトゥン・ビシク伝説を取り込んだ最初の歴史書として注目される。

この伝説は、ティムールの子孫でムガル朝を創建したバーブルが、サマルカンドから逃れる際に身重の妻を伴っていたとする。この妻はホジャンドの近くで男子を産んだが、バーブルは先行きの不安から、子供をこの地に置いていった。一説では、この男子は、黄金の揺りかご（アルトゥン・ビシク）に入っていたという。子供はウズベクのミン族に育てられた。そして、コーカンドのハーンはこの子孫とされるのである。すなわち、この伝説はコーカンドのハーンたちの系譜をバーブル、そしてその先祖であるティムールやティムールの妻の先祖であるチングス・ハーンと結びつけたのである。

もう一つの注目される作品は『友好の書』である。これはウマル・ハーンがオスマン朝君主であるマフムト2世（位1808-1839）に贈ったものである。内容はアリーシール・ナヴァーイー(d.1501)、ウマル・ハーン、ルトゥフィー、フズーリー(d.1556)の4人の詩集からなる。ウマル・ハーンは、チャガタイ文学最高の詩人ナヴァーイーを第一位におき、それに続くものとして自分の詩集を入れ、ルトゥフィーやフズーリーといった著名な詩人の前に置いた。自らの文学的才能とティムール朝との関係をオスマン朝君主に主張するためのものと考えられる。

さらにウマル・ハーンは1821年、『詩人達の集い』を編纂させた。この書にはウマル・ハーン自身の詩と彼を模倣する70名の詩人の詩が収められた。ウマル・ハーンは、この書を通じて、詩が重んじられたティムール朝フサイン・バイカラの宮廷を模倣したのである。

これらすべての作品は、コーカンド・ハーン国がティムール朝を自らの正統性の根拠としたことを示している。詩と系譜は、正統性を主張する手段であったのである。

(文責：近藤信彰)